

体育大学学生のスポーツマン的アイデンティティと 職業決定ステイタスが教職志望動機に及ぼす影響

—全国大会出場経験の有無による比較検討—

The Effects of Athlete's Identity of College Student of PE and
Career Decision Making Status on Motivation to Be a Teacher:
In Comparison to Having the Experiences of Participating in National Athletic Meets

キーワード：スポーツマン的アイデンティティ、職業決定ステイタス、教職志望動機、全国大会

Key words: athlete's identity, career decision making status,
motivation to be teachers, national athletic meets

大石 千歳

問題意識および目的

青年期にある高校生・大学生が将来の進路や職業を決めるにあたっては、アイデンティティ(自我同一性: Erikson, 1959)の確立・拡散という問題は不可避である。進路を考え決めることは、「自分は今後の一生をどう生きていきたいか」を選択し決断することに他ならない。その過程で悩まない青年はおらず、教育相談的なカウンセリングや見守りは重要である。本学(東京女子体育大学体育学部)は体育大学であり、体育大学の学生は何らかのスポーツの競技種目に幼少から取り組んできており、これまでの人生をかけてきたといっても過言ではない。子供のころから頑張ってきたことと「将来の職業」に対する考え方は、どのようにつながるのであろうか。運動部活動に熱心に取り組んでいると、指導者である教師から体育大学への進学を勧められ、大学で教員免許を取得して体育教師を目指すといふ、といった人生のキャリアパスを提示されたりする。それがどの程度実現可能なかは個々の生徒により異なるが、高校で受ける進路指導やキャリア教育の具体的な内容はこのようなものであることが多い。

本学は体育大学であり、大学体育学部学生の約8

割前後が中学校・高等学校の保健体育科教員免許を取得する。体育大学に進学を考えるという時点で、学生はスポーツマンとしてのアイデンティティを持っていると考えられる。その学生たちの8割前後が教員免許を取得することから、スポーツマンとしてのアイデンティティと体育教師という職業は、学生たちの意識の上で連続したものと考えられているといえる。しかし、実際に体育教師としての就職を目指しているのか、体育大学で取れる資格として教員免許を取得し、教員ではなくても将来何かの役に立てばよいと考えているのか、将来の職業に関する学生の意識は様々であると推測される。

本研究では、本学学生の職業決定に関するアイデンティティ・ステイタス、幼少時からのスポーツ経験に基づくスポーツマン的アイデンティティ、および教職志望動機の相互の関連性を検討する。以下に、本研究で用いることとした心理測定尺度の背景と、その尺度を選択した理由を紹介する。

スポーツ経験とスポーツマン的アイデンティティ、および職業の選択の関連性を検討した心理学分野における先行研究としては、奥田・中込(1993)がある。この研究では、Marcia(1966)の同一性地位尺度を、職業を選び決定するプロセスに適用できる形にした

Melgosa (1987) の尺度を日本語訳し、同一性(アイデンティティ)の達成、モラトリアム、拡散、早期完了(フォークロージャー)の4つの要素から職業選択に関する決断や考え方の状態、すなわち職業決定ステイタスを測定する尺度を作成した。本研究では、個々の調査対象者のアイデンティティの確立・拡散に関する現状を測定できる尺度であり、中でも職業の選択という側面に特化した奥田・中込(1993)の職業決定ステイタス尺度を採用することとした。

スポーツマン的アイデンティティに関しては、奥田・中込(1993)の場合は自我志向性(個人の競技への自我関与の仕方など内面的な要因)と社会志向性(他者との共有や共同など、外界との関わりの要因)の2要素からの測定を行うものであった。奥田・中込(1993)は、自我志向性と社会志向性の双方が高い者が職業決定に関して積極的な解決を行う方向性であり、自我志向性と社会志向性の双方が低い者は、職業決定に関して消極的であることを示した。しかしながら、奥田・中込(1993)のスポーツマン的アイデンティティ尺度は、いわば内向的か外向的かを測定しているようなもので、Erikson(1959)のアイデンティティ理論に沿った内容というには、不十分なところがあった。そこで本研究は、高見・岸・中込(1990)のスポーツマン的同一性尺度を用いて、スポーツマン的アイデンティティと職業決定ステイタスの関連性をより詳細に検討することとした。高見・岸・中込(1990)の尺度は、スポーツ活動を行う個人の自己感覚、独自性、自己受容、対人的役割期待、安定性、目的志向性、および対人関係の7要素を測定できる尺度である。この内容は、スポーツを行う個人が自分をスポーツマンとして定義し、Erikson(1959)のアイデンティティの理論に沿ってアイデンティティの在り方を検討できる尺度となっている。

教職志望動機の測定に関しては、大石(2014)が用いている春原(2010)の教職志望動機尺度を本研究でも用いる。この尺度は第一因子「学校教授志向」(5項目)、第二因子「目的無自覚・同調」(5項目)、第三因子「子ども志向」(2項目)、第四因子「恩師志向」(2項目)、第五因子「経験活用志向」(4項目)の計18項目から構成されている。体育大学の学生が体

育教師の職を志望する動機は、恩師から勧められた、恩師のような教師になりたい、子どもたちに自分が得意とするスポーツを教えたい、子どもたちの成長を助けたい、学校でつらい思いも含め様々な経験をしてきたことを生かしたい、など様々である。大石(2014)では、本学短期大学学生が過去にお世話になった教師との関係性が教職志望動機とどう関連を持っているかを検討するため、春原(2010)の尺度を用いている。本研究では、本学学生の教職志望動機に関する一連の研究の結果を比較しやすくすることも考慮に入れて、同じ春原(2010)の尺度を用いて、本学体育学部学生のスポーツマン的アイデンティティや職業決定ステイタスと教職志望動機の関連を検討する。

さらに教職志望動機に関連するものとして、学生が教職に対してどのようなイメージや興味を持っているかを知るために、山口・都丸・古屋(2010)の教職への興味尺度を用いることとした。この項目は、「教職自体への興味」と「労働条件」の2因子からなる尺度である。前者は子ども志向、楽しさ志向、成長志向、学校志向、対人志向など11項目、後者は身分や給与の安定、職業の社会的評価、地元で働けるなどの5項目である。また、学生が自分自身がもし教師になったらどのくらい有能と考えているか、同じく山口・都丸・古屋(2010)の教師効力感尺度によって測定することとした。この尺度は、教師としての効力感を表す1因子構造であり、16項目からなる尺度である。

加えて、体育大学での学びは幼少時から力を入れてきたスポーツ活動と、将来の職業とをつなぐ位置づけにあるといえるが、学生は大学のそのような位置づけや役割をどう意識しているだろうか。本研究では、半澤・坂井(2005)の学業と職業の接続に関する意識尺度を実施することとした。この尺度は、学業と職業がどの程度連続したものと捉えられているかを、理想と現実の差から捉えるものである。大学生が現在学んでいる学業に関して、学業を将来に生かせるか、学業は将来の仕事と関係しているか、学業は就職活動で求められる内容か、学業は将来の仕事の理解と関係しているか、学業は就職の機会を高めるか、学業は就職試験突破に必要なか、学業は将来の仕事の展望に役立つか、という7項目である。

ところで本研究は、体育大学学生の職業選択とアイデンティティに関する研究であるので、調査対象者である各学生の競技力の高さによる影響も、検討すべき重要な要因である。体育大学の学生といっても、全国大会レベルの高い競技力を持ち自分の競技力を伸ばす目的で入学してきている学生もいれば、子どもにスポーツを教える指導者になるための勉強をしたくて入学した学生もいる。全国大会に出場するほど競技力が高ければ、その競技力を体育大学でさらに高め、実業団等の選手を目指すというキャリアパスもある。そこまでの競技力でない場合は、これまで打ち込んできたスポーツ経験を職業に生かすには、何らかの形で指導者となることが最もイメージしやすいキャリアである。そこで本研究では、行ってきたスポーツ自体を直接的に職業につなげやすいか否かという観点で、高校時代に全国大会に出場した経験がある学生とそれ以外の学生に分けて分析を行い、両条件による結果の違いを検討する。高校時代の経験で分類する理由は、体育大学の進学を検討するのは高校時代であり、その時点での競技成績が将来の進路を考える際の重要な論点となると考えられるためである。

方法

以下の質問紙調査を行った。

調査対象者

平成26年度前期の本学体育学部3年の教職必修科目「教育心理学」履修者210名。

研究期間

平成26年7月に授業内で質問紙調査を行った。なお、各尺度の記載順は質問紙上の登場順となっている。

質問紙の構成

1. 教示文

調査は無記名で回答は研究の目的のみに使用すること、データは統計的に処理されること、学会発表や学術論文としての発表を目指していることを明記し、主旨を理解頂けた場合は回答をお願いする形式をとった。なお調査は本学の研究倫理審査委員会の承認を得た。

2. フェイスシート

スポーツ種目：小学校・中学校・高等学校・大学の各時期に定期的に実施し力を入れていたスポーツ種目を、1～3位まで挙げてもらった。

練習頻度：小・中・高・大の各時期に最も力を入れていたスポーツ種目の練習頻度（週何回）と1回の練習時間を尋ねた。

大会参加経験：小・中・高・大の各時期に最も力を入れていたスポーツ種目の大会参加経験（県大会や地区大会への参加回数、全国大会への参加回数）。

3. スポーツマン的同一性尺度（高見・岸・中込，1990）

スポーツ活動を行う個人の「自己感覚」（7項目）、「独自性」（2項目）、「自己受容」（5項目）、「对人的役割期待」（7項目）、「安定性」（2項目）、「目的志向性」（5項目）、および「対人関係」（6項目）の7要素を測定する、計34項目を実施した（5件法）。

4. 調査対象者の教職志望動機に関する質問

中学校・高校の教員免許を取得したいか（非常に思う～まったくそう思わないまでの4件法）とその理由、中学校・高等学校の教員になりたい程度（非常に思う～まったくそう思わないまでの4件法）とその理由を尋ねた。

・教師志望動機尺度（春原，2010）：第一因子「学校教授志向」（5項目）、第二因子「目的無自覚・同調」（5項目）、第三因子「子ども志向」（2項目）、第四因子「恩師志向」（2項目）、第五因子「経験活用志向」（4項目）の計18項目を実施した（4件法）。

・教職への興味尺度（山口・都丸・古屋，2010）：「教職自体への興味」11項目および「労働条件への興味」の6項目を用いた（5件法）。ただし「教育志向」に関する項目は、質問紙上の選択肢の数字が落丁していたため、「教職自体への興味」に関してはこの項目を除いた10項目を分析対象とした。

・教師効力感尺度（山口・都丸・古屋，2010）：教師効力感に関する1因子構造の16項目を実施した（5件法）。

5. 職業決定ステイタス尺度（奥田・中込，1993）

スポーツ活動を行う個人が職業の決定に関してど

のようなアイデンティティの状況にあるか、「達成」(6項目)、「モラトリアム」(6項目)、「フォークロージャー(早期完了)」(6項目)、および「拡散」(6項目)、計24項目を実施した(5件法)

6. 大学での学習内容と職業との接続性(半澤・坂井, 2005)

学業と職業がどの程度連続したものであるかに関する7項目を、半澤・坂井(2005)とは異なり、自分の現在の状況に関して尋ねる形で実施した(5件法)。

結果および考察

分析指標の作成

1. スポーツマン的同一性尺度

「自己感覚」(7項目)、「独自性」(2項目)、「自己受容」(5項目)、「対人的役割期待」(7項目)、「安定性」(2項目)、「目的志向性」(5項目)、および「対人関係」(6項目)の7要素に関して、各尺度項目の平均値をそれぞれ加算し項目数で割り、各指標を作成した。

2. 教師志望動機尺度

「学校教授志向」(5項目)、第二因子「目的無自覚・同調」(5項目)、第三因子「子ども志向」(2項目)、第四因子「恩師志向」(2項目)、第五因子「経験活用志向」(4項目)に関して、各尺度項目の平均値をそれぞれ加算し項目数で割り、各指標を作成した。

3. 教職への興味尺度

「教職自体への興味」(10項目)、「労働条件への興味」(6項目)に関して、各尺度項目の平均値をそれぞれ加算し項目数で割り、各指標を作成した。

4. 教師効力感尺度

1因子構造であるため、全項目を加算して項目数で割り、「教師効力感」指標を作成した。

5. 職業決定ステータス尺度

「達成」(6項目)、「モラトリアム」(6項目)、「フォークロージャー(早期完了)」(6項目)、および「拡散」(6項目)に関して、それぞれの因子に属する項目を加算して項目数で割り、各指標を作成した。

6. 大学での学習内容と職業との接続性

7項目の平均値をそれぞれ指標とすることにした。

統計分析の結果

1. 競技力別(全国大会参加の有無)による平均値の比較検討(t検定)

高校時代に全国大会への参加経験をもつ参加者(82名)ともたない参加者(128名)に分けた(以下全国あり群・全国なし群)。各指標について、全国あり群と全国なし群の平均値(SD)に関するt検定を行った(表1)。

教職志望動機について：全国あり群のほうが全国なし群よりも、同調志向得点が有意に高かった($t(205)=-2.707$, $p<.01$)。全国大会への出場経験がある学生のほうが、その競技力の高さから周囲に体育教師の道を勧められ、その意見に影響されて教職を志望する傾向があるといえる。他の教職志望動機に関する指標では、全国大会経験の有無による有意な差はみられなかった。また、教職イメージに基づいた教職興味、労働条件興味の両指標についても、全国大会経験の有無による有意な差はみられなかった。また、自分自身がよい教師になれるかという教師効力感についても、有意な差はなかった。

スポーツマン的アイデンティティについて：全国あり群のほうがなし群よりも、安定性、目的志向性ともに有意に高かった(順に $t(206)=-2.549$, $p<.05$; $t(204)=-5.229$, $p<.001$)。全国大会に出場経験がある学生のほうが、スポーツマンとしてのアイデンティティはより安定的であり、目的志向的であることが示された。他のスポーツマン的アイデンティティ指標には有意な差はなかった。

職業決定ステータスについて：達成、フォークロージャー、モラトリアム、拡散のいずれの指標も、全国大会参加の有無による差はみられなかった。

大学と職業の接続性について：「学業と仕事内容は関連している」「学業は就職時に求められる内容である」「学業は仕事の理解を高める」「学業は就職試験突破に必要な」の各指標は、全国なし群のほうが全国あり群よりも有意に高い得点であった(順に $t(205)=2.835$, $p<.01$; $t(205)=2.149$, $p<.05$; $t(204)=2.404$, $p<.05$; $t(204)=3.030$, $p<.01$)。ここでいう学業とは大学の(運動部活動ではなく)授業のことであり、授業内容と将来の職業を結び付けて考え

表1. 各指標の平均値(SD)

	全数(N=210)		全国なし(N=128)		全国あり(N=82)	
	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
スポーツマンのアイデンティティ						
自己感覚	3.60	(.56)	3.61	(.57)	3.59	(.55)
独自性	3.62	(.75)	3.55	(.76)	3.73	(.72)
自己受容	3.57	(.69)	3.52	(.71)	3.66	(.64)
对人的役割期待	3.44	(.58)	3.40	(.58)	3.51	(.57)
安定性	3.29	(.70)	3.19	(.69)	3.45	(.70)
目的志向性	3.31	(.60)	3.15	(.54)	3.57	(.60)
対人関係	3.86	(.56)	3.86	(.58)	3.87	(.52)
教職志望動機	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
教授志向	2.69	(.72)	2.71	(.71)	2.66	(.74)
同調志向	2.40	(.48)	2.33	(.48)	2.51	(.45)
子ども志向	2.90	(.81)	2.93	(.84)	2.85	(.75)
恩師志向	3.06	(.81)	3.06	(.83)	3.06	(.80)
活用志向	2.41	(.65)	2.39	(.62)	2.44	(.68)
教職への興味	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
教職興味	4.00	(.68)	3.98	(.68)	4.04	(.67)
労働条件興味	3.35	(.72)	3.33	(.71)	3.37	(.73)
教師効力感	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
教師効力感	3.31	(.74)	3.28	(.73)	3.36	(.76)
職業決定ステイタス	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
モラトリアム	3.60	(.68)	3.55	(.70)	3.68	(.66)
同一性達成	2.94	(.80)	3.00	(.82)	2.85	(.77)
早期完了	2.57	(.72)	2.56	(.72)	2.60	(.71)
同一性拡散	2.80	(.65)	2.77	(.66)	2.84	(.65)
学業と職業の接続意識	平均値	(SD)	平均値	(SD)	平均値	(SD)
学業を仕事の実践に生かす	3.68	(1.02)	3.73	(.97)	3.61	(1.11)
学業と仕事内容は関連	3.70	(1.01)	3.86	(.94)	3.46	(1.06)
就職時に求められる内容	3.60	(1.04)	3.72	(.98)	3.41	(1.09)
学業は仕事の理解を高める	3.60	(1.01)	3.74	(.98)	3.40	(1.02)
学業は就職機会を高める	3.56	(1.02)	3.62	(.96)	3.46	(1.10)
学業は就職試験突破に必要	3.59	(1.01)	3.76	(.95)	3.33	(1.05)
将来の仕事の展望に役立つ	3.62	(.98)	3.72	(.91)	3.46	(1.07)

ているのは、むしろ全国大会に出場したことの無い学生たちであった。大学での授業内容は自分自身の競技力を高めるというよりも、むしろ指導者になったときの指導法やスポーツに関する科学的な研究についての内容が多い。全国大会に出場してなくても体育大学に進学する学生は、競技者としてよりも指導者としての進路を考えて進学している場合が多いと考えられ、その結果大学の授業内容と職業をより結び付け

て考える傾向があるといえるだろう。

なお、教職興味、労働条件興味、教師効力感に関しては有意な差はみられなかった。

2. 教職志望動機・スポーツマン的アイデンティティ・職業決定ステイタスの相関分析

全国大会あり群・なし群のそれぞれについて、教職志望動機とアイデンティティに関する諸指標の相

関係係数を算出した。

全国あり群:表2に示したように、スポーツマン的アイデンティティ諸指標については、かなり多くの指標が教職志望に関する諸指標と有意な正の相関を示していた。つまりスポーツマンとしてのアイデンティティを持つ学生ほど、中学校・高等学校の保健体育科教師を志望する動機や教職への興味は高く、教師効力感も高いことが示されたといえる。ただし、教職志望動機における同調志向は、スポーツマン的アイデンティティのどの指標とも全く有意な相関を示さなかった。人に勤められるままに教職を志望するという同調志向は、他の指標とは全く異なる性質をもつものといえる。職業決定ステータス指標に関しては、達成(いろいろ考えた上で志望する職業を決定できた)指標が、同調志向を除くすべての教職志望動機関連の指標と正の相関を持っていた。教職志望の強い学生は、自分の将来の職業を体育教師に確実に定めているということ

が いえる。また、フォークロージャー(早期完了)も、教職興味、労働条件興味以外のすべての教職志望動機関連指標と正の相関を示していた。フォークロージャーは、自分自身で熟考して悩みぬいて職業を決めたというのではなく、親や世間の価値観を内面化して、悩むまでもなく早々に職業を決める、という傾向を表す指標である。したがって、教職を志望するという考えは明確でも、自分が実際に働く上での労働条件や職務内容までは、それほど深く考えていない可能性がある。モラトリウム、拡散については、モラトリウムが労働条件興味と正の相関を示した以外には、すべての相関係数が有意でなかった。職業を決めあぐねているモラトリウムの状態や、職業に対する考えがわからなくなってしまった拡散の状態では、教職を志望する動機は弱いといえる。

全国なし群:表3に示したように、全国なし群では、スポーツマン的アイデンティティにおける自己受容、

表2. 競技力高(全国大会出場あり)におけるアイデンティティ諸指標と教職志望諸指標の相関分析

	スポーツマン的アイデンティティ							職業決定ステータス			
	自己感覚	独自性	自己受容	役割期待	安定性	目的志向性	対人関係	モラトリ	達成	フォークロ	拡散
教授志向	.269*	.269*	.301**	.219	.082	.246*	.200	-.028	.553**	.353**	-.096
同調志向	.080	.087	.033	.117	.078	.071	.067	.061	.210	.275*	.120
子ども志向	.274*	.187	.358**	.250*	.226*	.385**	.205	.062	.466**	.381**	-.053
恩師志向	.285*	.310**	.418**	.289**	.201	.363**	.240*	.134	.387**	.242*	-.173
経験活用志向	.191	.293**	.229*	.219*	.259*	.386**	.082	-.061	.589**	.275*	-.053
教職興味	.484**	.422**	.542**	.380**	.382**	.372**	.463**	.198	.353**	.146	-.155
労働条件興味	.265*	.275*	.338**	.322**	.283*	.363**	.175	.232*	.254*	.110	.082
教師効力	.398**	.451**	.475**	.292**	.306**	.505**	.311**	.043	.614**	.309**	-.050

*. 相関係数は5%水準で有意(両側) **. 相関係数は1%水準で有意(両側)

表3. 競技力低(全国大会出場なし)におけるアイデンティティ諸指標と教職志望諸指標の相関分析

	スポーツマン的アイデンティティ							職業決定ステータス			
	自己感覚	独自性	自己受容	役割期待	安定性	目的志向性	対人関係	モラトリ	達成	フォークロ	拡散
教授志向	.154	.196*	.246**	.185*	.111	.264**	.157	-.028	.394**	.222*	.022
同調志向	-.186*	-.185*	-.163	-.124	-.027	-.088	-.104	.103	.144	.333**	.246**
子ども志向	.179*	.157	.125	.048	.041	.165	.167	-.055	.229*	.091	-.018
恩師志向	.231**	.129	.168	.109	-.023	.126	.203*	-.030	.304**	.060	-.083
経験活用志向	.018	.177*	.164	.097	.090	.264**	-.016	-.015	.390**	.224*	.126
教職興味	.459**	.405**	.362**	.321**	.185*	.192*	.323**	.182*	.189*	-.015	-.030
労働条件興味	.104	.109	.132	.137	.190*	.196*	.023	.246**	-.076	.208*	.176
教師効力	.138	.189*	.201*	.217*	.124	.327**	.190*	.067	.459**	.257**	.099

*. 相関係数は5%水準で有意(両側) **. 相関係数は1%水準で有意(両側)

役割期待および安定性の各指標の教職志望に対する影響力が、全国あり群と比較すると弱かった。特に子ども志向、恩師志向、経験活用志向は、全国なし群でのみ、有意な相関とならなかった。自己感覚指標も、全国なし群では影響力が弱いといえた。先述のt検定の結果からいえるように、全国なし群においては、自分が当該競技における専門の競技者であるというアイデンティティの感覚は、全国あり群ほどには高くない。そのため、スポーツマン的アイデンティティと教職志望動機の相関も有意にならなかった部分が多かったといえる。しかし職業決定ステイタスにおける達成指標では、全国あり群にひけをとらないほど教職志望動機との相関係数が有意になっていた。全国大会には出られなかったけれども、スポーツをしてきた中でいろいろと学ぶことがあり、恩師のような教員になりたい、子どもに教えたい、自分の経験を生かしたいという思いは強くなったのであろう。そしてそのために体育大学に進学してきたという本学学生の姿が浮き彫りになった。

3. 重回帰分析によるモデルの検討

全国あり群と全国なし群の相違点をより明確にするために、各群ごとに教職志望動機諸指標を従属変数、スポーツマン的アイデンティティおよび職業決定ステイタス諸指標を独立変数とする重回帰分析を行った。なお、重回帰分析を行う上で、サンプル数に対して指標の数が多すぎると分析の実行が困難になる。本研究は多くの指標を含んでいるため、単相関に関する先述の分析結果に基づき、影響力をもたない指標については予め除外して重回帰分析を行った。具体的には、スポーツマン的アイデンティティ

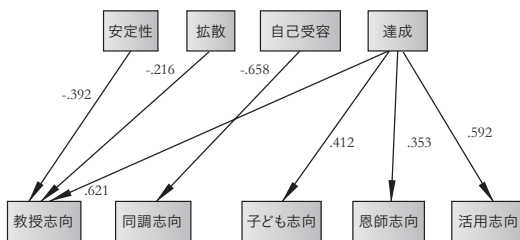


図1. 全国大会参加あり群の教職志望動機に関する重回帰分析

における「対人関係」を除外している。また、教職への興味尺度および教師効力感尺度の各指標は、教職志望動機諸指標と意味合いが類似していると考え、重回帰分析の対象とはしなかった。また、大学と職業の接続に関する7項目も、それぞれを指標として用いている性格上、分析に含めると指標が増えすぎるため、重回帰分析には用いていない。

全国あり群：図1に示した通り、職業決定ステイタスでは「達成」指標が、教職志望動機に対して強い影響力をもっていた。達成指標は、教授志向 ($\beta=.621, p<.001$)、子ども志向 ($\beta=.412, p<.05$)、恩師志向 ($\beta=.353, p<.05$)、および経験活用志向 ($\beta=.592, p<.001$) に対して有意な正のパスを示していた。自分の職業に関してよく考えて(体育教師として)決めたという意識は、教職志望における教えたという気持ち、恩師のような教員になりたいという気持ち、子どもとかかわる仕事につきたいという思い、いやなことも含め自分が経験してきたことを教職に生かしたいという志向性をより強めるといえる。また「拡散」指標は、教授志向に対して負の有意傾向のパスを示した ($\beta=-.216, p<.10$)。職業を決めあぐねて迷う思いは、教えたという志向を低くさせるといえる。

スポーツマン的アイデンティティ指標に関しては、そのうちの安定性から教授志向への負のパスが有意であった ($\beta=-.392, p<.05$)。安定性とは、競技に対する態度が安定しており、どんなときでも自分の力を発揮できるという内容である。全国大会参加経験がある人の中では、そのような競技に対する安定した自信を持つ人は、人に教えるよりも自分自身が競技者として活躍したいと考え、このような結果になるのではないかと推察される。また、「自己受容」は、「同調」に

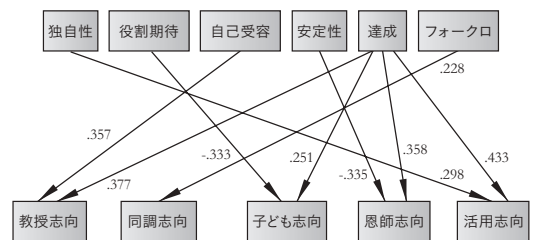


図2. 全国大会経験なし群の教職志望動機に関する重回帰分析

有意な負のパスを示した($\beta = -.658, p < .05$)。スポーツをしている自分に対して、これでよいのだと自分を信頼し、これからも上達していくといった感覚を持つほど、人から流されて教職を目指すことはないということが示されたといえる。

全国なし群：図2に示した通り、全国あり群と比較して、全国なし群では指標の相互の関連性がより複雑であった。職業決定ステータスに関する「達成」が教職志望動機の「教授志向」($\beta = .377, p < .01$)「子ども志向」($\beta = .251, p < .10$)「恩師志向」($\beta = .358, p < .01$)「活用志向」($\beta = .433, p < .001$)に有意および有意傾向の正のパスを示していた点は、全国あり群と共通であった。やはり、自分の職業的な将来をきちんと決めたいという思いは、将来の職業として教職を志望する上での教授志向、子ども志向、恩師志向、活用志向のいずれも強めるといえる。また全国なし群では、「フォークロージャー」が「同調傾向」に有意傾向の正のパスを示していた($\beta = .228, p < .10$)。早々と自分の職業を決めてしまう傾向は、人からの影響により教職を志望する同調志向を強めるといえる。

スポーツマン的アイデンティティにおける「安定性」は恩師傾向に負のパスが有意であった($\beta = -.335, p < .05$)。この結果は解釈が難しいが、自分の競技に対する態度が安定している人は、恩師のような先生になりたいというよりも、むしろ自分自身の教師像を追い求めるのかもしれない。全国大会出場者のほうが、自分のスポーツ生活における恩師の存在感が大きいのかかもしれない。「独自性」は「活用志向」に有意な正のパスを示していた($\beta = .298, p < .05$)。自分の経験を教育現場に生かしたいという思いは、スポーツマン的アイデンティティにおける、他の誰でもない自分自身を持つという要素によって強められるものといえる。他に、「役割期待」は「子ども志向」を弱めるという負の有意傾向のパスが示された($\beta = -.333, p < .10$)。スポーツ活動において自分の役割に順ずるといふ傾向は、たとえ意に沿わないことがあっても役割に即して行動するということで、純粋に子どもにスポーツの指導したいという思いとはまた別の要素を含むのかもしれない。

まとめ

本研究では、本学学生の幼少時からのスポーツ経験に基づくスポーツマン的アイデンティティと、職業決定に関するアイデンティティ・ステータスおよび教職志望動機の関連性を検討した。

1. 全国あり・なし群の平均値のt検定：全国大会への出場経験がある学生のほうが、教職志望動機における同調傾向が高かったことがわかった。競技力の高さゆえに周囲に体育教師の道を勧められ、その意見に影響されて教職を志望する傾向があるといえる。また全国あり群のほうがスポーツマンとしてのアイデンティティはより安定的であり、目的志向的であった。しかし授業内容と将来の職業を結び付けて考えているのは、むしろ全国大会に出場したことのない学生たちであった。

2. 指標相互の相関係数の検討：全国あり群では、スポーツマンとしてのアイデンティティを持つ学生ほど、中学校・高等学校の保健体育科教師を志望する動機や教職への興味は高く、教師効力感も高いことが示された。また職業決定ステータスでは、達成・フォークロージャーの傾向が強いほど、教職志望動機が強いことが示された。全国なし群でも、職業決定ステータスにおける達成指標では、全国あり群にひけをとらないほど教職志望動機との相関係数が有意であり、スポーツをしてきた中でいろいろと学ぶことがあり、教職志望動機を持ち、体育大学に進学してきた本学学生の姿が浮き彫りになった。

3. 重回帰分析：全国あり群では、職業決定ステータスにおける達成指標が、教職志望動機における教授志向、子ども志向、恩師志向、および活用志向を強めていた。しかしスポーツマン的アイデンティティにおける安定性は、むしろ教授志向を低めていた。全国大会経験者の場合、競技に対する安定した自信を持つ人は、人に教えるよりも自分が競技者として活躍したいと考えるのであろう。

全国なし群では、達成指標が、教職志望動機における教授志向、子ども志向、恩師志向、および活用志向を強めるといふ結果は全国大会経験あり群と同様であった。しかし、スポーツマン的アイデンティティ

ティにおける独自性が教職志望動機における活用志向を強めたり、安定性が恩師傾向を弱めたり、役割期待が子ども志向を弱めるなど、全国大会経験あり群とは異なる結果となった。また、職業決定ステイタスにおけるフォークロージャーは同調志向を高めていることが明らかにされた。

本研究の成果を本学学生に生かすために

職業経験を将来の職業につなげようとする場合、実業団の選手になるなど、自らが引き続き競技者であり続け、収入を得られる立場になろうとするには、全国大会に出場するような高い競技力が必須となってくる。中学校・高等学校の体育教師になるには、学力や人間性など、競技力の他にも重要な能力や資質があり、たとえ全国大会に出場していなくても、よい教師になれる可能性は十分にある。その意味で、競技力や将来の職業への考え方において多様な学生を擁する本学では、キャリア教育の内容に多様性を持たせ、それぞれの学生の幼少時から現在に至るまでのスポーツ経験の積み重ねが将来の職業につながるよう、指導体制を整えることが大切といえる。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959) *Identity and the life cycle*. New York W W Norton & Company. (小此木啓吾(訳編) 1973 自我同一性 誠信書房).
- 半澤礼之・坂井敬子(2005) 大学生における学業と職業の接続に対する意識と大学適応—自己不一致理論の観点から— 進路指導研究, 23, 1-9.
- 春原淑雄(2010) 親の要因、教職志望動機および教師効力感の関連: 教員養成課程の新入生を対象として 学校教育学研究論集, 21, 1-10.
- Marcia, J. E. (1966) Development and validation of ego identity status. *Journal of Personality and Social Psychology*, 3, 551-558.
- Melgosa, J. (1987) Development and validation of the occupational identity scale. *Journal of Adolescence*, 10, 385-397.
- 奥田愛子・中込四郎(1993) スポーツマン的アイデンティティの志向性と職業決定行動との関係

体育学研究, 37, 393-404.

- 大石千歳(2013) 教師との関わり経験と教師への信頼感が教職志望動機に及ぼす影響—キャリア教育・教育相談の観点による心理学的研究— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 48, 17-25.
- 大石千歳(2014) 教師との関わり経験と教師への信頼感が教職志望動機に及ぼす影響その2—体育系短大における小学校・幼稚園の教員免許取得希望者を対象とした調査— 東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要, 49, 11-25.
- 高見和至・岸 順治・中込四郎(1990) 青年期のスポーツ経験と自我同一性形成の諸相 体育学研究, 35, 29-39.
- 山口陽弘・都丸亜希子・古屋 健(2010) 教職志望者の職業興味と教師効力感に関する研究—教職への興味・教職の専門性に着目して— 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 59, 219-238.